翻訳テクストを用いたフランス語との比較からみる ルーマニア語間接話法における従属節の時制選択

川瀬 瑛美

1. はじめに

「主節の時制に合わせて従属節の時制が決まる」(安西 2011, p.93)と説明される時制の一致 [1]がロマンス諸語に広くみられる。しかし、ルーマニア語の間接話法においては、主節の時制に合わせて従属節の時制が選択されているとは言い難く、ルーマニア語に時制の一致があるとするかは議論の余地がある。本稿は、時制の一致がほぼ義務的なフランス語との比較を通じてルーマニア語の間接話法における従属節の時制選択を考察する。その際、間接話法がおかれる発話環境や、その従属節が表す意味内容の時間的限定性に注目する。これにより、従属節における時制選択の実態を明らかにするのみならず、ルーマニア語時制がどのように捉えられるべきかを提示する。論文の構成は次のとおりである。2 節で先行研究を紹介し、3 節ではフランス語の間接話法における時制の一致とルーマニア語のそれに類似する現象を概観する。4 節で研究の手法を述べたのち、その調査結果に基づいて 5 節で従属節が主節に対して先行を表す時制、6 節で同時を表す時制の考察を行う。7 節でまとめとする。

2. 先行研究と本稿の位置づけ

ルーマニア語関接話法を考察した論文には、Timoc-Bardy(2013)や Suzuki(2021)、Arjoca(2011)があり、いずれも時制の一致という観点で論じている。Timoc-Bardy(2013)は、ルーマニア語がフランス語などのロマンス諸語とは異なる時制体系を持つため、時制の一致が義務でないとし、Suzuki(2021)は、英文学のルーマニア語訳の検討から、ルーマニア語で時制の一致が現れる場合は、時制の一致が義務的な言語から翻訳する際に、原文から影響を受けた結果であるとする。Arjoca(2011)は、部分的に時制の一致があるとし、具体的には、ルーマニア語では現在形が直示性を失うことができるため、主節が過去の間接話法の従属節に半過去でなく現在形を用いることができ時制の一致をしないとする。他方、大過去に関してはフランス語と同じように用いられ、主節との先行関係を表す従属節において時制の一致として現れるとしている。

先行研究は、形態と意味の関係や言語接触、時制的価値の観点から現象を説明しているが、主張に対する反例も認められる。また、ルーマニア語間接話法にお

[1] フランス語学では「時制の照応」というのが一般的だが、今回はルーマニア語を取り扱った主要な先行研究のひとつである鈴木(2020)にならい「時制の一致」と呼ぶことにする。

いて、従属節の時制選択が具体的に何によってなされるのかは述べていない。これを明らかにするためには、形態と意味の関係や言語接触、時制的価値の観点のみならず、発話環境や、従属節が表す意味内容の性質といった間接話法がおかれる文脈を考慮する必要がある。本稿は、話し言葉か書き言葉かという発話環境と、時間的限定性という意味内容に注目し、ルーマニア語間接話法を考察する。

3. フランス語とルーマニア語の間接話法

3.1. フランス語の間接話法

フランス語とルーマニア語の間接話法について一般的に言われていることを確認する。まずはフランス語の場合について渡邊(2014)をもとに、直接話法から間接話法への変換を用いて説明する。主節が現在時制と未来時制の場合は直接話法と間接話法で従属節の時制に変化がないが、(1)が示すように主節が過去時制の場合、直接話法と間接話法で従属節の時制を変えなければならない。いわゆる時制の一致である。従属節の内容が(1a)は主節と同時、(1b)は主節に対して先行、(1c)は主節に対して後続する例である。

(1) a. Il a dit : « Je viens[現][2]. » → Il a dit qu'il **venait**[半過].
「彼は言った：私は来る」→「彼は来ると言った」
b. Il a dit : « Je suis venu[複過]. » → Il a dit qu'il **était venu**[大過].
「彼は言った：私は来た」→「彼は来たと言った」
c. Il a dit : « Je viendrai[単未]. » → Il a dit qu'il **viendrait**[条現].
「彼は言った：私は来るだろう」→「彼は来るだろうと言った」
(ibidem, pp.13-14) 筆者が一部改変

次にこれを時制体系のレベルで説明する。フランス語の時制体系の捉え方のひとつに、現在時基準時制と過去時基準時制による二分がある(渡邊 2014)。現在時基準時制とは発話時点に視点をおいて動詞の出来事を時間軸上に位置づける時制であり、過去時基準時制とは過去の一時点に視点をおいて動詞の出来事を時間軸上に位置づける時制である。具体的には、前者がフランス語の現在形・複合過去・単純未来・前未来、後者が半過去・大過去・条件法現在・条件法過去である。このふたつの時制群の間には、現在時基準時制に半過去活用語尾を付加すると過去

[2] 渡邊(2018)にならって、つぎのような時制の略称を用いる。[現]現在形、[半過]半過去形、[複過]複合過去形、[単過]単純過去形、[大過]大過去形、[条現]条件法現在形。ルーマニア語の未来を示す形式 3 種類はいずれも[未来]未来形と示す。ルーマニア語の条件法現在には時制用法がなく、過去から見た未来を表すには未来を表す形式の助動詞部分を半過去形におく。この場合を[過未]過去未来形と記す。

時基準時制になるという形態的な対応関係を持つ。(1)の直接話法から間接話法への変換にともなう従属節の時制のシフトは、ちょうどこの現在時基準時制からそれに対応する過去時基準時制への変換である。したがって、フランス語の間接話法における時制の一致について、「現在時基準時制で述べられた発話を過去におかれた間接話法の従属節に置く場合、基本的には対応する過去時基準時制にしなければならない」という時制選択の制約と仮定することができる[3]。

3.2. ルーマニア語の間接話法

つづいてルーマニア語の間接話法をみる。フランス語では過去におかれた間接話法の従属節で過去時基準時制が選択される一方で、ルーマニア語にこのような時制の制約はない。(2)はルーマニア語の現在形・複合過去・未来形で述べられた発話（直接話法で示す）を主節が過去の間接話法の従属節に置いた例である。フランス語であれば前述の通り過去時基準時制に変換しなければならないが、ルーマニア語ではその必要がない。

(2) a. Mi-a spus : – Sunt[現] supărat. →Mi-a spus că **e**[現] supărat.
「彼は私に言った：私は悲しんでいる」→「彼は私に悲しんでいると言った」

b. Mi-a spus : – Am lipsit[複過] o lună. →Mi-a spus că **a lipsit**[複過] o lună.
「彼は私に言った：私はひと月留守にした」→「彼は私にひと月留守にしたと言った」

c. Mi-a spus : – Voi pleca[未来] la Brașov. →Mi-a spus că **va pleca**[未来] la Brașov.
「彼は私に言った：私はブラショフへ発つだろう」→「彼は私にブラショフへ発つだろうと言った」

(Zafiu2013, p.63) 筆者が和訳・一部改変

さらに、フランス語が過去時基準時制を用いるように半過去・大過去・過去未来形を従属節に用いることもある。

(3) a. Mi-a spus că **era**[半過] supărat.
「彼は私に悲しんでいると言った」

b. Mi-a spus că **lipsise**[大過] o lună.
「彼は私にひと月留守にしたと言った」

---

[3] 時制体系の中核には組み込まれない近接未来・近接過去を説明から省いてしまったが、これらが主節が過去の間接話法の従属節に置かれるとき、助動詞が半過去になる。この場合も時制の一致に含む。

c. Mi-a spus că **avea să plece**[過未] la Brașov.
「彼は私にブラショフへ発つだろうと言った」
(ibidem, pp.63-64) 筆者が和訳・一部改変

3.3 ルーマニア語間接話法における従属節の時制をどう考えるか

Zafiu(2013)によれば、(2)で間接話法の従属節で用いられている現在形(2a)、複合過去形(2b)、未来形(2c)は、発話時点を基準点とする直示時制としてではなく、主節の事行を基準点とする相対時制として働いている。したがって、(2a)現在形が主節との同時関係[4]、(2b)複合過去形が先行関係、(2c)未来形が後続関係を示す。このような意見は、他の先行研究にも見られる。Arjoca(2011)は、ルーマニア語の「間接話法では、主節の事行が可能なもうひとつの発話時点となることによって、発話時点の『忘却』が容易に引き起こされる」(p.42 下線は筆者による)と述べ、鈴木(2020)も、ルーマニア語の関接話法では「誰かの言葉を伝達しようとするもの（以下「伝達者」と呼ぶ）が自分の視点とは別に、元の話者の視点をもとにして時制を選ぶ」、そして、「元の話者が使った時制が、直示的にではなく、支配節の動詞の示す時制を基準点として照応的に用いられる」(p.41 下線は筆者による)と述べている。したがって、(2)で従属節におかれた現在形・複合過去・未来形が、主節の事行を基準し、相対時制であるということは、複数の先行研究で合意が得られているといえる。ところが、この見方に少し補足を加える必要がある。たしかに、従属節の事行がいつ起こったのかといった出来事の時間関係を考えた場合、主節の事行を「いつ起こったのか」を規定する基準点としていると仮定すれば、従属節に、直示時制と同じ形式の現在形・複合過去・未来形が選ばれることの説明がうまくいく。しかし、直示時制と同じ形式が用いられていることに注目し、(2)の従属節の時制は、完全なる相対時制として機能しているのではなく、間接話法の発話者にとっての「われ・ここ・いま」となにかしらの連続性を持つ、直示性を残している時制であると捉えることにする。このように考えることにより、発話環境が時制選択を左右しているという説明が可能になる。

また、フランス語時制の一致と同じ時制を従属節に用いる(3)のうち、従属節が半過去の(3a)について、Zafiu(2013)は、従属節の内容が発話時点にはもう存在しない事実であることが推測可能な文であるとする[5]。(3a)から「彼はもう悲しんでいない」と解釈

---

[4] フランス語では、従属節の内容が一般的真理である場合や間接話法の発話者が従属節の内容を引き受けている場合に時制の一致の例外として半過去ではなく現在形が用いられることがあるが(Riegel et al 1994, p.1014)、(2a)のルーマニア語現在形はそれとは異なる。現在形(2a)は一般的真理であるか否かや発話者の引き受けの有無を必ずしも問題にしない。

[5] Arjoca(2011)も「t_0 に対して先行する時点に有効な出来事が、発話時点には存在するのをやめるという前提を半過去は含意しうるようだ」(p.49)と述べている。

することもできるということである。しかし、このような推測を可能にしているのは、半過去ではなく文脈であると考えられる。例えば、主節が認識の動詞である次の(4)は、半過去が表す事行が「もう存在しない事実」であるというよりも、「さっきからそうであった」と解釈される。発話時点（＝気が付いたとき）にも足が震えていると推測できる。

(4) Numai când am ajuns înăuntru mi-am dat seama[複過] că picioarele îmi **tremurau[半過]**.
「なかに入った途端、自分の足が**震えていた[半過]**ことに私は気が付いた[複過]」
(Agnès Martin-Lugand, *Oamenii fericiți citesc și beau cafea*, trad.: Carmen Otilia Spînu p.84)
筆者が和訳・一部改変

(3a)と(4)を考え合わせると、半過去は、未完了アスペクトであるので事行の始点と終点について言及しないが、(2a)の従属節におかれた現在形と異なり、事行が t_0 以前の過去にあることを「明示」しているといえる[6]。

以上、フランス語とルーマニア語の間接話法の概要をみた。主節が過去におかれた間接話法の従属節で、フランス語では時制の一致が起こり、ルーマニア語では(2)と(3)の 2 つの形式があり得る。2 言語の動詞形態に着目すると、フランス語では現在時基準時制と過去時基準時制は、半過去活用語尾の付加により派生する形態的対応関係にあるが、ルーマニア語の場合、(2)の現在形・複合過去・未来形と(3)の半過去・大過去・過去未来形のあいだには、形態的な対応関係がない。2 言語は時制体系が大きく異なるといえる。よって、(3)のようにルーマニア語で間接話法の従属節に半過去・大過去・過去未来形が現れる場合、表面的にはフランス語の時制の一致と類似した現象にみえるが、何によってその時制が選択されるのか、その仕組みは異なることが予測できる。それを承知の上で、次の 4 節では、フランス語とルーマニア語の間接話法を比較するが、フランス語でもルーマニア語でも、従属節に半過去・大過去・過去未来形が現れる場合を「時制の一致あり」、現在形・複合過去・未来形が現れる場合を「時制の一致なし」と便宜上、呼ぶことにする。

[6] 母語話者に従属節が現在形の(2a)と半過去の(3a)がどのように異なるか尋ねると、半過去の(3a)のほうが「伝えたいことがはっきりしている」、「情報が詳しい」等のコメントが聞かれる。半過去により、従属節の事行がいつ起こったのか、時間的な前後関係が明白になるためと考えられる。

4. 研究の手法

4.1. 調査対象

時制の一致がほぼ義務的なフランス語との比較により、ルーマニア語間接話法の特徴を捉えるために、フランス文学のルーマニア語訳とフランス語原文をコーパスに用いた。間接話法の主節にある導入動詞が過去時制の文を集め、従属節の動詞がそれに対して同時、先行、後続を表す時制ごとに分類した[7]。主節が発話動詞のほかに認識動詞の文も同じ構文をとり、時制の一致が関係するため対象とした。翻訳を用いることは、同じ状況、つまり同じ発話場面においてそれぞれの言語で、どのような発話が現れるかを比較できるという利点がある。

今回使用したテクストは、Agnès Martin-Lugand 著 *Les gens heureux lisent et boivent du café*（2014 年 Pocket）である。ルーマニア語訳は Carmen Otilia Spînu による（2016 年 Editura Trei）。物語のあらすじは、突然の交通事故で夫と娘を失った主人公が、アイルランドへ渡り田舎の人々と関わりながら立ち直っていくという内容である。生前の夫の発言を思い出す場面など他者について語られることが多く、間接話法の研究に適したテクストである。原文のフランス語からルーマニア語へ違う構文に翻訳されたものは、比較が難しいため除外している。これ以降の例文と引用の和訳は筆者によるものである。

4.2. 調査の結果

集めた例 122 中、フランス語では時制の一致ありが 119 例、なしが 3 例[8]と傾

---

[7] 主節が単純過去、複合過去、半過去、大過去、条件法過去で、従属節が、ルーマニア語なら直説法の時制、フランス語なら直説法の時制と過去からみた未来を示す条件法現在になっている文が対象である。従属節が条件法過去となっている文もあったが、時制用法ではなく法としての用法ととれるものであり、「従属節が法として条件法の価値を持つ場合は、主節の時制に影響されず独立節と同じように時制が決定される」(朝倉 et al 2002, p.138)ため、今回は除外した。

[8] この 3 例は、従属節に複合過去(i a)、現在形(ii a)、単純過去(iii a)が用いられていた。

(i) a. - Diane, tu ne m'as même pas demandé[複過] comment ça **s'est passé[複過]** aujourd'hui. (ch.1, p.20, l.17)

b. - Diane, nici măcar nu m-ai întrebat[複過] cum **a fos[複過]**t astăzi. (ch.1, p.18, l.1)

「ディアンヌ、きみは今日何が**あったか[複過]**僕に尋ねてさえもいないね[複過]」

(ii) a. - (...) Vous n'avez pas encore compris[複過] que je ne **veux[現]** pas revenir vivre avec vous. (ch.2, p.39, l.24)

b. - (...) Încă n-ați înțeles[複過] că nu **vreau[現]** să mai locuiesc cu voi. (ch.2, p.35, l.21)

「私がまたあんたたちと暮らすのは嫌だって**[現]**こと、あんたたちまだわかってないんだね[複過]」

(iii) a. Il dut[単過] sentir que je l'**observai[単過]**, il se tourna et me regarda droit dans les yeux. (ch.7, p.132, l.5)

向が極めてはっきりしているのに対し、ルーマニア語では一致ありが 58 例、なしが 64 例とおよそ半々となった。

表(5) 2 言語における間接話法の時制の一致ありとなしの数

	フランス語		ルーマニア語	
	一致あり	一致なし	一致あり	一致なし
全体 122 例	119	3	58	64
割合（%）	97.5%	2.5%	47.5%	52.5%

このように 2 言語の一致ありなしの様相が大きく異なっているという事情のなかで、フランス語で一致ありの文がルーマニア語でどのように訳されるのだろうか。表(6)はフランス語で一致ありの 119 例を、従属節が主節に対して①同時、②先行、③後続を表す例の 3 つにわけ、それぞれにおいてルーマニア語で一致ありの時制となしの時制のどちらに訳されたか、その数をまとめたものである。

表(6) フランス語で一致あり 119 例のルーマニア語への訳され方

	一致あり		一致なし	
①同時	半過去	32	現在形	32
②先行	大過去	22	複合過去	6
③後続	過去未来形	3	未来形	24
合計		57		62

b. Probabil a simțit[複過] că-l **priveam[半過]**, căci s-a răsucit și s-a uitat la mine. (ch.7, p.121, l.3)
「私が彼を**じっと見てしまった[(仏)単過／(ル)半過]**ことに彼は気づいたに違いない[(仏)単過／(ル)複過]。彼が振り向いてまっすぐ私を見据えた」

フランス語では「従属節の内容が現在を基点として考えられるとき、単過、複過が用いられ」、「従属節の内容が現在まで継続する事実、超時的真理であることを表すには現在時制を用いる」(朝倉 et al 2002)。これらの場合が一致なしとなる。対応するルーマニア語訳をみると、従属節が複合過去の(i a)と現在形の(ii a)はルーマニア語でも同じ時制に訳され一致なしとなっているが、従属節が単純過去の(iii a)はルーマニア語では半過去に訳され時制の一致ありとなっている。(iii)は、時制の一致がおよそ義務的なフランス語で一致のない文が、時制の一致が任意とされるルーマニア語のほうで一致ありとなっているので、ルーマニア語において原文に影響されず時制の一致が現れたケースとみることができる。Suzuki(2021)はルーマニア語で時制の一致が現れる場合は、時制の一致が義務的な言語から翻訳する際に原文の影響を受けているのではないかと述べているが、(iii b)はその反例となる（ただし、(iii a)は従属節が半過去でも自然であり、単純過去 observai が半過去 observais の誤植の可能性もある。別の版等で確認する必要がある）。

①の主節と同時を表す時制では、一致あり半過去に訳されたものと一致なし現在形に訳されたものは同数、②の主節に対して先行を表す時制では、一致あり大過去のほうが一致なし複合過去より多く優勢である。③の主節に対して後続を表す時制では、一致あり過去未来形よりも一致なし未来形のほうが多い。

このように主節との関係によって時制の一致の現れやすさが異なる（②先行＞③同時＞①後続）ことに加え、地の文か会話文かによっても従属節でどの時制が用いられるかの傾向が見られた。表(7)は、表(6)の結果を地の文と会話文にわけ、それぞれにおける一致ありと一致なしの数を示している。

表(7) 地の文と会話文の内訳

	地の文		会話文	
	一致あり	一致なし	一致あり	一致なし
①同時	半過 **28**	現 **15**	半過 **4**	現 **17**
②先行	大過 **22**	複過 **1**	大過 **0**	複過 **5**
③後続	過未 **3**	未来 **15**	過未 **0**	未来 **9**

会話文においては、一致なしが圧倒的に多く、一致ありが見られるのは①同時に限られている（半過去 4 例）。地の文のほうでは、一致ありが①～③いずれにおいても見られる。次節以降、一致ありとなる時制となしとなる時制のどちらがどのように選択されるか、発話環境と時間的限定性に基づいて考察する。まず先に、主節に対して②先行を表す時制、大過去・複合過去を、続いて、①同時を表す時制、半過去・現在形を取り扱う。③後続については別稿に譲ることにする。

5. 従属節が主節に対して先行を表す大過去・複合過去の考察

フランス語では、従属節が主節に対して先行する出来事を表す場合、もっぱら大過去が用いられ時制の一致を見せるのに対し、ルーマニア語では、3.2 節で確認したように、大過去を用いる場合と複合過去を用いる場合がある。先行研究では、この 2 つの時制がどのように用いられるかについて、次のような記述がある。Manea(2008)は、「話し言葉においては、複合過去のほうが好まれ、大過去の使用頻度が減っているが、書き言葉においては、大過去が十分多く使用されている」(p.438)と述べ、Avram(2001)は、大過去は「話し言葉において、頻繁に複合過去で置き換えられるため、めったに使用されない時制である。表現の明瞭さと豊かさにとっての損失である」(p.229)、また、複合過去の「大過去的価値は頻繁に見られるが、出来事の時間関係を明確にする必要のある場合には避けられるべきである」(p.225)と述べている。まとめると、書き言葉では大過去が用いられ、話し言

葉では、大過去の代わりに複合過去が用いられる。書き言葉か話し言葉かといった発話環境の違いによって 2 つの時制が使い分けられていると言える。さらに、大過去は、筆者が調べたところによると、書き言葉のなかでも新聞記事では稀であり、小説というテクストジャンルにおいて特に頻繁に用いられることがわかった [9]。今回、フランス文学のルーマニア語訳をコーパスとして調べたなかでも、表(7)が示すように、大過去と複合過去の分布は、地の文に大過去（大過去 22：複合過去 1）が、会話文に複合過去（大過去 0：複合過去 5）が現れやすい傾向が示された。小説の地の文は書き言葉に相当し、会話文は書き言葉ではあるが、登場人物たちの会話が直接引用で書かれているので、話し言葉に相当する。「書き言葉（特に小説）では大過去が用いられ、話し言葉では、大過去の代わりに複合過去が用いられる」という先行研究のとおりとなった。

ルーマニア語において大過去と複合過去が、書き言葉か話し言葉かといった発話環境に応じて分布を分かつことは、フランス語大過去・複合過去との相違点を示しているとも言える。それがよくわかるのがコーパスから得られた会話文である。フランス語原文と比較してみると、原文フランス語では地の文のみならず、会話文にも大過去が用いられているが、ルーマニア語訳では(8b)のように、そのすべてが複合過去に訳されている。Arjoca(2011)が、ルーマニア語間接話法の従属節における大過去について、「相対時制である大過去は、フランス語と同様に用いられる」(p.49)と結論づけているが、会話文、すなわち話し言葉には、これが当てはまらないことになる [10]。

---

[9] オンラインニュース記事 https://sibiu100.ro/ とオンライン文芸雑誌 LiterNautica.com を用いて、ニュース記事か小説かといったテクストジャンルによる大過去の使用頻度を比較した。ニュース記事では、大過去の生起が 58 記事 21,828 語中 3 例だったのに対し、文芸雑誌では、短編小説 13 編 22,310 語中 130 例であった。小説よりもニュース記事のほうが、時制の用いられ方が話し言葉に近いといえる。

[10] 地の文ではどうかと言うと、原文フランス語では、従属節が大過去の文は 21 例あり、そのうち 19 例がルーマニア語訳で大過去、1 例が複合過去、1 例が半過去に訳されていた。ルーマニア語訳では、従属節が大過去の文は 22 例あり、そのうち 19 例が原文フランス語大過去から、2 例が半過去から、1 例が近接過去の助動詞が半過去形におかれたものからの訳であった。以上から、物語の地の文においては、間接話法の従属節に限れば、2 言語の大過去の用い方はだいたい類似すると言える。しかし、主節での大過去の使用に視野を広げると、フランス語とルーマニア語の大過去はやはり大きく異なる。原文フランス語では、物語の基調となる時制として大過去を連続的に用いるパラグラフがあった。これがルーマニア語訳では複合過去となり、フランス語のように大過去を用いることができない。フランス語大過去が書き言葉か話し言葉かといった発話環境に関わらず生起し、物語の基調となる時制としても用いられるのに比べると、ルーマニア語大過去は使用域が狭く、代わりに複合過去が広く使われると言える。

(8) a. - Edward ne veut pas en parler, il m'a just assuré[複過] que papa **était parti[大過]** paisiblement. (ch.4, p.79, l.29)

b. - Edward nu vrea să vorbească despre asta, m-a asigurat[複過] doar că tata **a plecat[複過]** împăcat. (ch.4, p.72, l.27)
「エドワードはそのことを話したがらないの。彼は私に、父さんは安らかに**眠った[(仏)大過／(ル)複過]**とだけはっきり言ってくれたわ[複過]」

フランス語と異なり、ルーマニア語では、会話文、すなわち話し言葉に、大過去ではなく複合過去が用いられることは、3.3 節で提案したように、複合過去が完全なる相対時制ではなく、直示との結びつきを残していると捉えることで説明できる。話し言葉という発話環境は、「書きことばよりも（中略）、『われ・ここ・いま』の中心性が強く、発話時点への位置づけや、発話時点との連続性に言及しやすい」(渡邊 2014, p.135)という性質があり、この影響を受けて大過去よりも、直示との連続性を残す複合過去が用いられやすいと考えられる。書き言葉に相当する地の文においても、複合過去が 1 例だけ認められた。それが(9)の文であるが、同様な説明が可能である。物語は主人公が家族を交通事故で失ったときの回想で始まるが、(9)はその場面を締めくくる文である。

(9) a. Je m'étais dit[大過] qu'ils **étaient morts[大過]** en riant. (ch1, p.11, l.18)

b. Mi-am spus[複過][11] că **au murit[複過]** râzând. (ch1, p.9, l.16)
「彼ら（夫と娘）は笑いながら**死んだ[(ル)複過／(仏)大過]**のだと私は思った[(ル)複過／(仏)大過]」

(9)は、物語の地の文という大過去が生起しやすい発話環境にあるが、複合過去で述べることにより、(9)を発話する者にとっての「われ・ここ・いま」と連続性を持つ内容となる。地の文(9)の発話者は、物語の語り手ということになるが、一人称小説であるので、語り手と語られる物語のなかの主人公は同一人物である。(9)は、ナレーションはではなく、主人公の心情を提示している、もしくは、語り手が語り手としてではなく、つらい体験をした当事者として心情を述べているのである。

6. 従属節が主節に対して同時を表す半過去・現在形の考察

つづいて半過去・現在形の考察に入る。話し言葉・書き言葉といった発話環境の違いに注目すると、表(7)から、会話文では半過去よりも現在形の生起が十分多い。複合過去同様、話し言葉においては、その発話環境の特性により、直示との

[11] フランス語と異なり、現代ルーマニア語で物語の基調となる時制は複合過去である。

連続性を残す現在形が従属節に現れやすいといえる。会話文で半過去の 4 例は、主人公の友人が第 3 者の過去について語る場面にまとまって現れていた。3.3 節で述べた、従属節の事行が t_0 以前の過去にあることを明示する半過去といえる。

地の文では、半過去のほうが多いものの、現在形も全体の 3 分の 1 以上見られ、発話環境という観点だけでは半過去・現在形のどちらが選択されるかを説明できない。ここで、「時間的限定性」という観点から考察する。時間的限定性とは、「特定時における〈個別具体的な一時現象〉か、特定化のない〈恒常的な特徴〉かを表し分ける文法的カテゴリー」(工藤 2006, pp.108-109)であり、これによって文法形式を使い分けるかどうかは言語によってさまざまである。Berthonneau & Kleiber(1997)は、時間的限定性によって、フランス語間接話法における従属節の半過去を、次の 2 種類に分けている。

(10) Paul a dit que Pierre **buvait[半過]** une bière
「ピエールがビールを**飲んでいた[半過]**とポールが言った」

(11) a. Galilée a dit que la terre **tournait[半過]** autour du soleil
「地球は太陽の周りを**回る[半過]**とガリレオが言った」

b. Paul a dit qu'il **était[半過]** spécialiste de la choucroute à la bière
「シュークルートのビール煮込みの専門家**である[半過]**とポールは言った」

(ibidem, p.132)一部筆者が加筆

(10)の半過去が、個別具体的な一時現象を表す半過去であり、(11)の半過去が、恒常的な特徴を表す半過去である。恒常的な特徴を表す半過去には、(11a)のような一般的真理を表す半過去と、(11b)のような人の特性や性格を表す半過去がある。いずれも半過去により表される状況が、変化を起こすとは考えにくい安定した特徴・特性である。さらに B&K(1997)は、フランス語半過去が時間軸上に自ら定位できず先行文脈をよりどころにする照応時制であることを踏まえて、個別具体的な一時的現象を表す(10)の半過去は、先行文脈が示す過去時を照応先とし、その一部分を表しており、半過去と照応先が部分と全体の関係となるという。Manea(2008)によれば、ルーマニア語半過去も同様な特徴を持ち、「言語表現や文脈、言語外文脈から得られる過去時を照応する照応時制」(p.424)であり、「照応先となる事行の時間と半過去によって表された事行の時間の関係は部分(半過去)／全体（照応先）の関係」(p.425)となる [12]。したがって、(10)のような個別具体的な一時現象を表すフランス語半過去は、ルーマニア語でも半過去に訳すことができる。一方で、恒常的な特徴を表す(11)の半過去のほうは、B&K(1997)は、先行文

[12] B＆K(1997)は un temps anaphorique méronomique 部分・全体関係に基づく照応時制と名付けているが、Manea(2008)は un timp anaforic metonimic 換喩的照応時制と表現している。

脈が示す過去時という照応先を持たず、同じ従属節中の自身の主語 il（彼）、la terre（地球）を照応先とする。このタイプの半過去は照応先となる事柄全体を特徴づけると分析している。このような(11)をルーマニア語に訳すと、従属節は半過去ではなく、現在形にするのが自然な文となる。まとめると、個別具体的な一時現象は、フランス語でもルーマニア語でも半過去で表すことができるが、恒常的な特徴は、フランス語では半過去だがルーマニア語では現在形となる。時間的限定性によって、2 言語で選択される時制が異なるのである。これをふまえて、今回用いたコーパスの地の文で、半過去・現在形のどちらがルーマニア語訳で選択されているかを観察する。

6.1. コーパスにおけるフランス語半過去のルーマニア語訳

今回用いたコーパスにおいて、恒常的な特徴を表すフランス語半過去は 4 例あり、ルーマニア語訳ではすべてが現在形となっていた。(12)は、恒常的な特徴のうち、一般的真理を表す例である。

(12) a. Un autocollant sur le pare-brise me rappela[単過] qu'ici la conduite se **faisait[半過]** à gauche. (ch.3, p.44, l.1)

b. Un autocolant pe parbriz mi-a amintit[複過] că aici șofatul se **face[現]** pe stânga. (ch.3, p.39, l.1)
「フロントガラスのステッカーが私に、ここでは**左側通行である[(仏)半過／(ル)現]**ことを思い出させた[(仏)単過／(ル)複過]」

(12)はアイルランドに引っ越した主人公が体験したカルチャーショックを述べており、「アイルランドでは左側通行である」という一般的真理を表している。つづいて次の(13)(14)(15)は、恒常的な特徴のうち、人の特性や性格を表す例である。

(13) a. Je lui dis[複過] que mes propriétaires **étaient[半過]** charmants, que j'**avais dîné[大過]** plusieurs fois chez eux, que tous les habitants m'**avaient accueillie[大過]** à bras ouverts, que j'**allais[半過]** régulièrement prendre des verres au pub. (ch.3, p.59, l.19)

b. I-am povestit[複過] că proprietarii **sunt[現]** fermecători, că **luasem[大過]** masa de mai multe ori la ei acasă, că toți locuitorii mă **primisera[大過]** cu brațele deschise, că mă **duceam[半過]** în mod regulat să beau la pub. (ch.3, p.53, l.18)
「私は彼に、大家さんたちは**素敵だ[(仏)半過／(ル)現]**し、何度も彼らの家で**夕食をとった[大過]**、地元の人全員が私を**大歓迎してくれた[半過]**し、定期的にパブに飲みに**行っている[半過]**と話した[(仏)単過／(ル)複過]」

(14) a. Jamais il ne m'aurait confié mon passeport ou celui de Clara, il disait[半過] que j'**étais[半過]** tête en l'air. (ch.2, p.28, l.5)

b. Nu mi-ar fi încredințat niciodată pașaportul meu sau pe al Clarei, zicea[半過] că **sunt[直現]** cu capul în nori. (ch.2, p.24, l.32)
「彼は私やクララのパスポートを一度も私に託すことはしなかっただろう。私は**抜けているところがある[(仏)半過／(ル)現]**と彼は言っていた[(仏)単過／(ル)複過]のだから」

(15) a. Colin m'avait murmuré[大過] une dernière fois qu'il m'**aimait[半過]**, j'avais tout juste eu le temps de lui répondre avant qu'il ne s'endorme paisiblement. (ch.1, p.16, l.10)

b. Pentru ultima oară, Colin mi-a șoptit[複過] că mă **iubește[直現]**, abia am avut timp să-i răspund înainte să adoarmă liniștit. (ch.1, p.14, l.3)
「最後にコランは私に**愛している[(仏)半過／(ル)現]**とささやき[(仏)単過／(ル)複過]、彼が静かに眠ってしまう前にかろうじて私が返事をする時間があった」

(13)は、4つある従属節のうち1つめに注目すると、主人公の大家がどのような人物かを述べている。(14)は夫から言われていた主人公の性格を従属節が表している。(15)は従属節が人の「性格」を表しているというには無理があるかもしれないが、コランと主人公は夫婦の関係であることから、従属節の「愛している」は個別具体的な一時的現象というよりは恒常的な特徴である。いずれもフランス語では半過去となっているが、ルーマニア語訳では半過去とならず現在形が用いられている。

一方で、フランス語半過去がルーマニア語訳でも半過去となった地の文をみると、以下の例のような個別の出来事を表すものであった。従属節の内容は、恒常的な特徴ではなく、個別具体的な一時現象であるといえる。

(16) a. Un coup d'oeil à ma montre m'indiqua[単過] qu'il ne me **restait[半過]** que peu de temps. (ch.2 p.41, l.14)

b. O privire spre ceas mi-a arătat[複過] că îmi mai **rămânea[半過]** puțin timp. (ch.2, p.37, l.9)
「時計を見ると私にはわずかな時間だけが**残っている[半過]**ことがわかった[(仏)単過／(ル)複過]」

(17) a. Ce n'est qu'une fois à l'intérieur que je réalisai[単過] que mes jambes **tremblaient[半過]**. (ch.5, p.97, l.1)

b. Numai când am ajuns înăuntru mi-am dat seama[複過] că picioarele îmi **tremurau[半過]**. (ch.5, p.84, l.3)
「なかに入った途端、自分の足が**震えている[半過]**ことに私は気が付いた[(仏)単過／(ル)複過]」

さらに、(13)に注目すると、1 つの文中で恒常的な特徴か個別具体的な一時現象かによって、時制が使い分けられていることもわかる。(18)として以下に再掲する。

(18) a. Je lui dis[複過] que mes propriétaires **étaient[半過]** charmants, que j'**avais dîné[大過]** plusieurs fois chez eux, que tous les habitants m'**avaient accueillie[大過]** à bras ouverts, que j'**allais[半過]** régulièrement prendre des verres au pub. (ch.3, p.59, l.19)

b. I-am povestit[複過] că proprietarii **sunt[現]** fermecători, că **luasem[大過]** masa de mai multe ori la ei acasă, că toți locuitorii mă **primisera[大過]** cu brațele deschise, că mă **duceam[半過]** în mod regulat să beau la pub. (ch.3, p.53, l.18)

(18)には従属節が 4 つあり、フランス語では半過去、大過去、大過去、半過去とすべてが過去時基準時制で時制の一致をしている。ルーマニア語では、1 つめの恒常的な特徴を表す現在形を除いて、フランス語と同じ時制に訳されている。フランス語とルーマニア語両方で半過去となっている 4 つめの従属節は、主人公がアイルランドに引っ越してきた後に行うようになった新しい習慣を表している。従来の習慣ではなく新しい習慣であるため、恒常的な特徴というよりは個別具体的な一時現象といえる。

以上をまとめると、ルーマニア語の主節が過去時制の従属節における半過去・現在形の選択は、会話文（話し言葉）では、話し言葉という発話環境の特性により、基本的に直示との連続性を残す現在形が用いられ、従属節の事行が t_0 以前の過去にあることを明示する場合には半過去が選択される。地の文（書き言葉）では、今回コーパスを用いて検討した限りでは、従属節の時間的限定性によって時制選択がなされ、個別具体的な一時現象であれば半過去、恒常的な特徴であれば現在形が用いられるといえる。しかし、恒常的な特徴を表す従属節の例が 4 例と少ないこと、Suzuki(2021)では 1 例であるが反例が見受けられる[13]ことから、さらなる検討が必要である。

---

[13] Suzuki(2021)は、間接話法の従属節に相当する自由間接話法の独立節（下線部）で、恒常的な特徴を表しているにも関わらず、半過去となっている例を挙げている。

(iv) am răspuns[複過] că **era**[半過] o întrebare dificilă, dar că în general, nu **agream**[半過] o astfel de soluție. <u>Legea **era[半過]** lege și **trebuia[半過]** să i ne supunem</u>.

(Agathe Christie, *13 probleme,* trad.: Cristina Mihaela Tripon, p.151) 筆者が一部加筆

「私は彼女に、それは難しい問題だ[半過]、けれども、全般に自分としてはそんな解決法は感心しない[半過]、と答えました[複過]。<u>**法は法だ[半過]**、従うことが**必要だ[半過]**とね</u>」

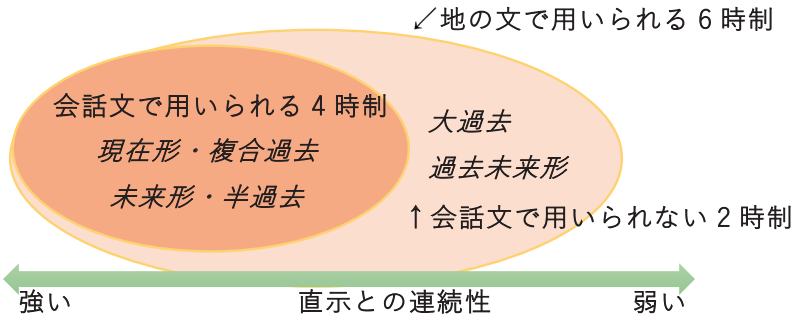
(アガサ・クリスティー『火曜クラブ』中村妙子訳 p.235) 筆者が一部加筆

今回は詳しく論じないが、3.3.節で半過去を用いることで文脈によってさまざまな含意が生まれえることをみたように、ここでも恒常的な特徴を半過去で表す場合、なにかしらの発話者の主観が含意されると考えられる。たとえば、(11a) Galilée a dit que la terre

7. まとめと今後の展望

時制の一致が義務的なフランス語との比較により、ルーマニア語間接話法における従属節の時制選択を捉えることを試みた。発話環境の違いに注目することで、話し言葉と書き言葉で選択される時制に違いがあることを示すことができた。また、従属節で用いられる現在形や複合過去が、主節の事行時を基準として時間関係が決まる相対時制として機能しつつも、直示との連続性を持つ時制であると考えることにより、なぜこれらの時制が話し言葉で使用されるのかを説明可能にした。書き言葉で、半過去・現在形のどちらが選択されるかは曖昧であるが、時間的限定性という観点から部分的な傾向を捉えた。

3.1 節で触れたが、ルーマニア語時制には、フランス語のような現在時基準時制と過去時基準時制の形態的対応関係といったものがなく、また、本稿で 2 言語の大過去と半過去は適応範囲が異なることも明らかになった。したがって、ルーマニア語時制を捉えるには、フランス語とは異なる分類をする必要がある。今回取り扱った 6 時制は、4.2 節の表(7)から、会話文に生起可能な 4 つの時制と、そうではない 2 つの時制（言い換えると、地の文にのみ用いられる時制）に大別できる。これを図にすると次のようにルーマニア語時制を捉えることができる。



図(19) 表(7)に基づくルーマニア語時制の分類

図(19)は、直示時制か相対時制かといった分類ではなく、直示との連続性をどの程

---

tournait autour du soleil を同じ時制のままルーマニア語に訳すと、母語話者の内省では、従属節の内容に対する反対意見があると発話者が思っているという含意が出るという。

(v) ??Galileo a spus[複過] că pământul **se învârstea[半過]** în jurul soarelui

「地球は太陽の周りを**回る[半過]**とガリレオが言った」

そしてこの例のように、従属節の内容、が恒常的な特徴のなかでも一般的真理として強いものの場合、反対意見があるとは考えにくく、文の容認性がさがる。

度持つかという程度差による時制の捉え方である。各時制の直示との連続性の程度と、発話環境の性質に応じて生起する時制が選択される。本稿では、主節が過去時制の間接話法における従属節の時制のみを取り扱ったが、他の従属節や主節での時制選択や、今回触れなかった時制についても、この捉え方が有効であるかどうか、今後検討していく。

使用したテクストの書誌情報

Agnès Martin-Lugand, *Les gens heureux lisent et boivent du café*, 2014, Pocket, Suite du premier tirage, 2022.

Agnès Martin-Lugand, *Oamenii fericiți citesc și beau cafea*, Traducere din franceza de Carmen Otilia Spînu, Editura Trei, 2016.

Agatha Christie, *13 probleme,* trad.:Cristina Mihaela Tripon, București, Editura RAO, 2014.

アガサ・クリスティー『火曜クラブ』中村妙子訳, 東京, 早川書房, 2003.

参考文献

安西記世子 (2011) 「時制の照応」 髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也 (編著) 安西記世子・小倉博行・酒井智宏 (著) 『フランス語学小事典』 駿河台出版社 p.93.

Arjoca- Ieremia, E. (2011) « Peut-on parler de « concordance des temps » en roumain ? », *Temps, aspect et classes de mots : études théoriques et didactiques*, *Collection Études linguistiques*, édit par Arjoca-Ieremia, E., Avezard-Roger, C., Goes, J., Molin, E. et Tihu, A., Artois Presses Université, pp.35-52.

朝倉季雄 (著) 木下光一 (校閲) (2002) 『新フランス文法辞典』 白水社.

Avram M. (2001) *Gramatica pentru toți*, Humanitas, București.

Berthonneau A.-M. et G. Kleiber (1997) « Subordination et temps grammaticaux: l'imparfait en discours indirect », *Le français moderne*, 65(2), pp.113-141

工藤真由美 (2006) 「アスペクト・テンス」 小林隆編 『シリーズ方言学 2 方言の文法』 岩波書店, pp.93-136.

Manea, D. (2008) « Timpul » *Gramatica limbii române vol. 1*, Academina Română, Institutul de Lingvistică "Iorgu Iordan - Al. Rosetti,,, București, Editura Academiei Române, pp.394-448.

Riegel, M., Pellat, J-ch et Rioul, R. (1994) *Grammaire méthodique du français*, P.U.F., Paris.

鈴木信吾 (2020) 「ルーマニア語における『時制の一致』あり（有標）・なし（無標）について—アガサ・クリスティの原文とルーマニア語訳文中で間接話法がもつ対応関係をもとに—」 『東京音楽大学研究紀要』 43, 東京音楽大学, pp.39-61.

Suzuki, S. (2021) « Tense agreement as a marked option in Romanian indirect speech: Exploration and contrast with English based on (translation of) Agatha Christie's short stories », *Studii și cercetări Lingvistice*, 72(1), Editura Academiei Române, pp.123-145.

Timoc-Bardy, R. (2013) « Le roumain： « une langue sans concordance des temps » ? », *Langages*, 191, pp.53-66.

渡邊淳也 (2014) 『フランス語の時制とモダリティ』 早美出版社.

渡邊淳也 (2018) 「フランス語大過去形の特徴的用法について」 『筑波大学フランス語フランス文学論集』 33, 筑波大学, pp.81-112.

Zafiu, R. (2013) « Mood, tense, and aspect », *The grammar of Romanian*, édit par G. Pană Dindelegan, Oxford Univ. Press, Oxford, pp.24-65.

（かわせ　えいみ／東京大学大学院）